

中国語と日本語の電話会話における相づち使用の一比較
—形式と頻度の観点から—

楊 晶

要 旨

本稿は、日常会話における相づちの「形式」及び「頻度」に着目し、相づち使用に影響する要因について考察したものである。分析に用いた資料は、会話の内容や性質が異なる「雑談」と「依頼」の場面で行なわれた電話会話で、各々の場面の中国語母語話者同士／日本語母語話者同士による会話各1組、計4組である。会話資料に現われている相づちについて言語別に分析した結果、次のようなことが分かった。中国語の相づち使用の特徴としては、形式はほとんど変わらないが、相づちの頻度は話の内容に大きく影響されることがあげられる。他方、日本語の相づちは、形式は会話参加者の人間関係に大きく影響されるが、頻度はほど一定している。

【キーワード】相づち、頻度、形式、会話の内容、人間関係

1. はじめに

80年代に入ってから、相づちは日本語の会話を円滑に進める上で不可欠な要素として注目され始め、その後、それに関する研究が様々な観点からなされてきた。小宮(1986)、黒崎(1987)、水谷(1988)、ザトラウスキー(1991)によると、相づちの表現形式や頻度及びタイミングなどは、会話の内容や会話の流れ、年齢差・男女差・階層差等と大きく関連するという結果を得ている。また、中国語との対照研究としては劉(1987)がある。劉は中日の相づちの頻度及びタイミングに差異のあることを指摘している。そこで、本稿は、中国語と日本語の会話中の相づち使用に影響する要因を明らかにし、考察することを目的とする。

2. 本研究で扱う相づちの定義

相づちをめぐる定義は研究者によって様々である。本研究の目的は話し手の発話に対する聞き手の反応を見ることにあるため、相づちを広義に解釈する立場に立ち、広い意味で会話の進行を促したり助けたりする機能を持つものを相づちとして取り扱う。小宮(1986)、メイナード(1993)の定義を参考にして、次のように定義する。

「相づち」とは、話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話が終了した直後に、聞き手が自由意志に基づいて送る（非言語行動を含む）短い表現である。

言語的表現には、「はい」「ええ」「うん」「そうですか」のような相づち詞（中国語では、これに相当するような感嘆詞や言い回し）、くり返し、言い換え、先取り、話し手の話に対する感想やコメントなどを取り扱うことにする。相づち詞以外の言語的表現を本稿では「他の形式」と総称する。

非言語行動の「笑い」についても、聞き手が話し手に対して示す積極的な反応と考えられるので、相づちと認めて扱うことにする。

3. 研究方法

3.1. 分析資料

中国人同士の母語による電話会話（CC）、日本人同士の母語による電話会話（JJ）を収録した。話し手の話し方などの、話し手側の状況が相づちに影響することを考慮し、CCとJJの中で、特定の一人（J1とC1）が主に話し手になっている4組のものをデータとして分析することにした。4組の会話はすべて女性同士の会話で、合計65分13秒である。分析に用いた電話会話の資料の概要は表1に示した。なおCは中国人、Jは日本人のことである。

表1. 分析資料の概要

資料番号	会話者	会話者間の関係	会話の内容	会話時間
CC-a	C1 C2	比較的親しい友人同士・ C1のほうがやや年上	C1の病状、現在の様子、健康を保つ方法、C2の修論と進路、帰国後の行先、C2の受験に関する情報。途中から発話交替が多くなるが、主にC1が話し手になっている。	27分38秒
CC-b	C1 C3	同じ大学の知人同士・ C1のほうが年上で先輩	被調査者探しの依頼及びC1の研究について。C1の研究概要、被調査者探しの依頼、被調査者の条件説明、研究の進み具合と心境。C1がほとんど話し手に回っている。	8分42秒
JJ-a	J1 J2	同じゼミの仲間同士・ 比較的親しい・J1のほうが年上だが、学年は下	主に共有知識に基づく会話。統計学の話、J1の研究、集中講義、本の紹介、メールのトラブル、エアロビクス。J1の発話がJ2より長い。話者交替が多く、盛り上がる	20分58秒
JJ-b	J1 J3	知人同士・J1のほうが年上で先輩	被調査者探しの依頼及び実験法について。被験者の条件、実験実施の計画、J3のアドバイス。話者交替は少なく、主にJ1が話し手になっている。	8分50秒

3.2. 研究目的と分析観点

日本語においては、会話の内容や会話参加者の人間関係（親疎／上下）が

相づちの使用に影響を与えることが既に先行研究によって明らかにされた。しかし、中国語の相づち使用に影響を与える要因にはどのようなものがあるか未だに不明である。そこで類似した条件のもとで起きた中国語と日本語の自然な電話会話について調べて対照することにより、両言語間の異同を明らかにすることを旨とする。そのため、主に聞き手になっている人の相づちについて、形式（異なり数も含む）と頻度に絞って分析し、頻度が話の内容とどう関わっているか、また、形式が話し手との人間関係とどう関わっているか、という2点から考察を試みる。

4. 結果と考察

4.1. 中国語の場合

表2は、中国語会話資料（CC）に現われている（主に話し手となっているC1のものも含む）相づちの回数、異なり数、相づち詞の主な形式、相づちの頻度を示したものである。「他の形式」については、くり返し、言い換え、コメントなどが出現する度に異なる形式と見て、異なり数として扱う。「笑い」については、言葉を伴わないものだけ扱い、（ ）の中に回数を記した。各頻度欄の上の数字は、どのくらいの時間間隔で相づちを打ったか、会話の総時間数を相づちの総回数で割って算出した全体の平均である。下の数字は、それぞれの会話中でC1が話している総時間数をC2とC3の各々の相づちの回数で割って出した。

表2. CCにおける相づちの使用状況

資料番号	会話者	総回数	総異なり数	個人回数	個人の異なり数	主な相づち詞と回数	頻度
CC-a	C1	185	相づち詞 19 他の形式 10 笑い (16)	49	相づち詞9・他の形式4・笑い(3)	嗯嗯10、啊啊9、嗯8、啊6	平均 9.0 秒
	C2			139	相づち詞18・他の形式6・笑い(13)	嗯69、嗯嗯31、啊4、对对对4	C2 9.2 秒
CC-b	C1	56	相づち詞 11 他の形式 8 笑い (0)	4	相づち詞3・他の形式1・笑い(0)	ウン39、ハイ19、ソウダスネ15 アソウダスカ10、ア、ホント8	平均 9.5 秒
	C3			52	相づち詞10・他の形式7・笑い(0)	エエ75、ウン12、ソウダスネ18 エーエー13、アア7、	C3 9.3 秒

以下、C2とC3の相づちにおいて、形式と頻度の点で会話によって変化があるかどうかについて見ることにする。

まず、C C-aについて見てみる。これは、C 1が体調を崩して寝込んでいたということを聞いたC 2がC 1にかけた見舞いを目的とする電話である。前半はC 1が病気になったときの様子や現在の体調、また健康を保つ方法などに関する話が中心になっている。ところが、後半は話題が転換し、主にC 2の進路についての会話である。C 2の発話数が比較的少なく、各発話の長さも短い。C 2は主に聞き役に回っていた。ゴールが特に決められていない。この会話を「雑談」型とする。

「健康を保つ方法」という話題に移る前までは、主として電話の受け手であるC 1が掛け手であるC 2の質問に対して答える形で会話が進行している。C 1の答えの発話はかなり長く、C 2の相づちが比較的多い。つまり話者交替がそれほどない。ところが、その後は、話者交替が頻繁になるが、相づちなしの話者交替が大半である。そのため、相づちが極めて少数となる。そして終結部に入る直前の、C 2の受験したい大学に関する情報提供になると、またC 1の発話が長く、C 2の相づちが少ないという展開になる。

相づちの形式に関しては、延べ異なり数は19であるが、もっとも主要な相づち詞に当たる「嗯」「啊」及びその重ね型（例えば「啊啊」「嗯嗯」など）が首尾一貫して使われている。この「嗯」と「啊」は、中国語の他の相づち表現同様待遇的な意味合いを持たない。「聞いている」「分かっている」「どうぞ、話を続けて下さい」「同感です」という機能を重ね持っている。故にすべての場面に対応できる。

相づちの頻度に関しては、平均して9.2秒に1回C 2が相づちを打っているが、話の内容によって差が大きく出ていることが観察された。例えば、会話が開始して間もなく、次のような対話があった。（尚、網掛けの部分が相づちである。また、頁数の関係で、中国語の原文を省略することにした。）
会話例①（C 1の発話が18秒、相づちは6回、平均して3秒に1回）

（訳文）

C2: また痩せたでしょう。

C1: うん。その時、汗もたくさん出て、ほぼ虚脱状態でした。二日間ほど寝込んでいて、

C2: ソウ ウン

C1: 昨日起きたら、なんかふらふらしていました。今日もそうです。今、部屋の掃除をし

C2: ソウ

C1: たり、布団を干したりしていました。とても寒くて、くたびれたような気がします。

C2: ウン エエ ウン

さらに、後半部において数は少ないが、会話例①と同じように相づちが頻繁に打たれている例をもう一つ挙げる。

会話（抜粋）例②

（C 1 の発話は65秒、相づちは18回、平均して3.6 秒に1 回程度）

（訳文）

C1:もし、出版社のような、或いはそういうような研究機関があれば、就職してもいいと

C2:

ウン

C1:思うんですけど、普通の会社なんかは、いつかくびになるかも知れませんね。でも、

C2:

ウン

ソウソウ

C1:対中貿易のような業務があれば、話しは別ですけどね。そういうふうな仕事をして

C2:

ウン

エエ

C1:まあ良いとも思います。というのは、会社が対中貿易さえやれば、あなたが必要にな

C2:

エエ

C1:るから。一般の事務なんかはととてもつまらないでしょ。

C2:

エエ

ソウソウ

例①においては、C 2 がもっとも知りたかったC 1 の今の様子が語られている。C 2 がC 1 の話を傾聴している、非常に心配しているという態度や気持ちこれらの相づちによってはっきりと話し手に伝わっている。例②においては、C 1 のアドバイスについて関心を持って丁寧に聞いている、また賛成するというC 2 の態度が明確である。

会話例①②の他に、C 1 が病気の原因や病後の飲食、精神状態について述べている時（相づちの頻度はそれぞれ3.1 秒、5.8 秒、6.3 秒）も、同様な傾向が見られる。病状や体の様子に関連する話となると相づちの頻度が比較的高くなるのは、C 2 の話に関心を持つことであり、電話をした主たる目的だからであろう。

上記の傾向とは対照的に、相づちの頻度がかなり低い箇所も観察された。次の会話はその1 例である。

会話例③（C 1 の発話は34秒、相づちが1 回）

（訳文）

C1:わたしの場合は、もし翌日に何か用事があれば、目覚し時計をセットしておきますね。

C2:

C1:ただ、その目覚し時計が鳴る前にわたしは必ず目がさめます。或いは、前の晩になか

C2:

C1:なか眠れなくて、三、四時間も寝返りを打ったりします。やっとな寝付いて、深い眠り

C2:

C1: についたころ、目覚し時計が鳴り始めました。本当に悔しい。わたしはそういうタ

C2:

C1: イブなんです。つまり、いくら疲れても寝付きが悪いんです。徹夜しても翌日寝られ

C2:

C1: いのです。疲れた時、顔色も悪いですよ。けれども、横になっても眠れません。

C2:

ア、ソウ

C1: 自律神経失調症なんです。

C1 が述べていることは、本人にとっては大きい悩みであり、C2 にとっては予想外のことで、やや深刻な話である。そのため、C2 は声を出さずにずっと聞いていたのであろう。そしてその発話がいよいよ完了する (C1 がどのように悩んでいるのかよく分かった) 時になって初めて「ア、ソウ」と相づちを打った。

また、C1 が不満を持っている一泊研修の感想 (9.8 秒に 1 回)、修論の書き方 (9.7 秒に 1 回)、受験したい大学に関する情報提供 (9.9 秒に 1 回) などの時にも、例③と同様のことが見られた。これらの内容もすべて話し手の C1 にはより詳しいことであると同時に、C2 にとってはとても知りたい大事な新情報である。C2 はたまに相づちを打つことにより、伝えてくれる情報に対して「理解している」「次へどうぞ」という態度を示すのであろう。

次に、CC-b における相づちの使用実態について見ることにする。

これは一方的に話すタイプの会話である。表 2 によれば、CC-a の中の聞き手である C2 と比べて聞き手 C3 の相づちの異なり数がぐっと減り、相づち詞の形式が比較的単調であると言える。相づち的な機能をする「笑い」も見られない。CC-a ほど気楽な内容ではないからであろうと考えられる。しかし、C3 が使用した主な相づち詞は 1a と余り変わらない。中国語の相づち詞はもともと種類が少なく、定型化されているものは「是吗」「嗯」「啊」などだけである。

まず会話の進行過程において相づちの形式の変化があるかどうかについて見てみたところ、1a 同様に明確な変化はない。次に、相づちの頻度の変化について見てみると、1a において観察された同じことがここでも見られる。つまり、内容によって頻度が大きく変化する。一例を取りあげて見てみよう。

会話例④：(41 秒の会話で、相づちは 1 回)

(訳文)

C1: お願いしたかったのは次の二つのことです。一つは、まあ急がなくて結構ですから、

C3:

- C1: 受験が終わった後でもいいですけど、(アンケートに) 丸をつけてもらいたいで
 C3:
 C1: す。二つ目は、つまり、もし留学生のお友達で、中国人で、しかもまだそんなに年が
 C3:
 C1: っていない、そう、30歳ぐらい、30歳以下にしよう、そんな人がいたら、紹介し
 C3:
 C1: てもらえませんか。(中略) もしどなたか二人ぐらい心当たりの人がいれば、アンケー
 C3:
 C1: トに答えることを頼んでみてくださらないかなと思って、

ソウデスカ

C1はここで、C3への被験者依頼及び他の被験者探しの依頼、それに、被験者になる条件について話していた。これはC1の方からの用件説明の場面である。双方にとってもっとも重要な部分と言えよう。C3は黙って発話の終りまで聞いて、そこで初めて「そうですか」という相づちを打ち、「言ったことは分かった」という理解を示す信号を送ったのである。

このように、話の内容という観点からC3の相づちの使用頻度について分析を行なった結果、会話例④と同様のことが他にも観察された。例えば、④C1の研究の詳しい内容の紹介(17.3秒に1回)、⑤C3からの実験への質問に対する回答(24.7秒に1回)、⑥研究が余り進んでおらず、悩んでいる心境(17.5秒)、などである。つまり、聞き手にとって、話の内容が「新しい情報」、「重要な話」、「相手のほうがより詳しいこと」である場合には、相づちの数は平均して少ない傾向にあると言えよう。

では、どのような内容の話に対して相づちを打ちながら聞いていくのであろう。次の会話を見て検討してみよう。

会話例⑤(61秒、8回。7.6秒に1回程度)

(訳文)

- C1: 最初の時、統計なんか使うつもりはなく、ただパーセンテージで見たかったんです。
 C3:
 C1: 統計学の「正規分布」とか、「分散分析」とかは、やりたくありませんでした。しかし
 C3: アア
 C1: 最近はかなり進歩してきましたね。こんなにたくさんのデータだと統計で処理するの
 C3: ソウデスネ
 C1: 当然のことだと思われていますよね。以前のやり方で書いたあの論文はもうだめ。
 C3: ホント

C1: うん、ほんとうですよ。すごいプレッシャーですよ。いまもう神経質に。とりあえず

C3: アア ア、ソウデスカ

C1: もうちょっと量を増やして、そして統計学をやらなくてはというふうに思います。だ

C3: エエ エエ

C1: から、お友達のあなたたちをお願いしてみることにしました。

C3: エエ、ソウデスネ

聞き手であるC3はC1より統計学に詳しい。そのため、C3は統計の手法に変えた理由や、そのために大量の被験者が必要になってくる事情に対し比較的多く相づちを入れることによって理解を示したのだと解釈できよう。

相づちの頻度が比較的高いところは、上記の例以外にも数箇所あった。例えば、④C1の研究テーマに関する話(3秒に1回)、⑤調査方法の紹介(会話が2か所、それぞれ4.4秒に1回、7.8秒に1回)、⑥C1が努力したい気持ち(4秒に1回)などがそれに当てはまる。④については以前耳にしたことがあるから、既知情報としている、⑤については、C3は同意・賛成の態度である、⑥については、同感・支持の態度表明、と考えてよいのではなかろうか。

なお、CC-aとCC-bにおいて、主に聞き手になっている人のそれぞれの相づちの平均頻度はそれぞれ9.2秒、9.3秒であり、ほとんど変わらないが、話の具体的な内容によっては、頻度の差が非常に大きいとしか言えない。

以上の分析から、話の内容が相づちの頻度を左右すると言えよう。

なぜ、重要な話、または自分にとっては新情報などの時に相づちが少ないのであろうか。中国では、一般に「人の話を黙って聞くものだ」と言われる。特に相手が重要な話をしている途中、声を出したりすると邪魔になるし、また聞き逃してしまう恐れがあるので、なるべく静かに聞く。重要な話が一旦終了した後、今度、聞き手はそれに対して何らかの意見や態度を表明する。事実、会話例③においても、C2は発話権を取った後すぐに「寝る前にワインをすこし飲むといいですよ」とアドバイスしたのである。

<中国語の相づちの形式と頻度の変化について>

相づちの形式は、人間関係による変化はほとんどない。しかし、相づちの頻度は、話の内容による変化が非常に大きい。自分にとって内容的にそれほど深刻でない事であったり、自分が詳しい分野の話であったりする時や、話の内容に対して賛成支持するような場合には、相づちの頻度がかなり高いが、

話し手のほうがより詳しい内容や、自分にとって特に重要である新情報に対しては、余り相づちを打たず黙って聞く傾向がある。また、話し手が一方的に話す時には、相づちは比較的多く打たれているが、話者交替が頻繁に行なわれるやり取りでは、相づちは少ない傾向にある。つまり、相づちなしの話者交替が多いのである。

4.2. 日本語の場合

日本人同士による2組の会話について見てみる。表3は、4.1.で既に説明した表2と同様のものであり、JJにおける相づちの使用されている状況である。

表3. JJにおける相づちの使用状況

資料番号	会話者	総回数	総異なり数	個人回数	個人の異なり数	主な相づち詞と回数	頻度
JJ-a	J1	332	相づち詞 50 他の形式 21 笑い (12)	139	相づち詞37・他の形式6・笑い(9)	ウン39、ハイ19、ソウデスネ15 アソウデスカ10、ア、ホント8	平均 3.8 秒
	J2			193	相づち詞25・他の形式15・笑い(3)	エエ75、ウン12、ソウデスネ18 エーエー13、アア7、	J2 4.1 秒
JJ-b	J1	101	相づち詞 18 他の形式 5 笑い (0)	36	相づち詞11・他の形式3・笑い(0)	ハイ13、ア、ソウデスカ6、ア ア4、ソウデスネ4、エエ3	平均 5.2 秒
	J3			65	相づち詞15・他の形式2・笑い(0)	エエ17、ハイ16、ア、ハイ6、 エーエー5、ソウデスネ4	J3 5.5 秒

JJ-aは、集中講義に出席しているJ1が、参加していないJ2に講義と関連する用件を知らせるためにかけた電話である。用件はすぐに終わり、その後は集中講義に関連することが主な内容である。CC-aと非常によく似ている。まず相づちの形式について見る。J2の相づち詞「エエ」「エーエー」は相づちのほぼ半数を占めており、安定感をもたらしている。改まりの度合いが中間的である「エ系」(注)が使用されている理由として以下の3つが考えられよう。会話者の人間関係が比較的親しく、使用者J2の年齢もJ1より下であること、話の内容が気楽であること、である。

次に、相づちの頻度について見てみよう。聞き手の相づちは平均して4.1秒起きに1回打たれており、CC-aの9秒台に比べて非常に頻繁だと言えよう。さらに会話過程において頻度の変化の有無について見ると次のようなことが分かった。

J1が電話した目的を述べる時(7.7に1回)や、本の名前を紹介する時の会話(質問と応答が多い。6.4秒に1回)では、相づちは少ないが、それ以外は、話者交替が頻繁に行なわれる対話であるか、それとも、一人がやや長く話す場合であるか、また話題がかわるかどうか、などとは無関係に、相づちの頻度はほとんど3秒~4.4秒であった。つまり、この会話における相づちの頻度はかなり平均していることが分かる。J1が電話の目的(用件の連絡)をJ2に話している時に相づちが控えられたのは、J2にとってその内容が知らないことだからであろう。

また、CC-aに比べて特に目立つのは発話権の交替が行なわれる際の相づちの使用である。次の会話を見てみよう。

会話例⑥(下線付きの相づちに注意のこと。××は聞き取れない部分)

- J2: またしばらく××××××× (笑い) ソウナンデスヨ
J1: ソウデスネ。 ちょっと力蓄えてね、風邪も治さなければ
J2: ソウデスネ。 なんか、直らなくて、××××××といけないんです。
J1: ば、 ウン ウン。 でも
J2: ア、ソウデスネ。 いま××××
J1: ちょっと今日の声、元気 ウン

上の会話において、今まで聞き手であった人は、相づちによって発話権を取り、その後自分が話し手となって発話を始めるのである。これはいわゆる日本語母語話者の「相づちによる発話権の獲得」である。JJ-aにおいては、このような用法の相づちがかなり多く見られる。それに対して、CC-aの中国語会話においては、このような発話権が交替される時の相づちは非常に少ない。相づちによって話者交替を果たすのであるから、会話の過程において、話の進め方が異なっても(つまり、一方的に話すか、あるいは話者交替が多い対話式であるか)、相づちが比較的的平均的になっているのであろう。このことは中国語と対照的になっている。

では、JJ-bに現われている聞き手の相づちについて見てみよう。JJ-bはJJ-aに比べて相づちの異なり数も、相づち詞の形式も、また頻度も少ない。会話はJJ-aほど盛り上がらなかった印象である。では、相づちの形式や頻度の変化は見られるのであろうか。

まず形式について見てみるが、双方とも改まり度の高い「はい」「ええ」「そうですか(ね)」が主流をなしている。しかも、これらの相づちが会話全体を通して安定して使用されており、JJ-aより丁寧度のやや高い場面

と言える。これは、たいして親しい間柄ではないという人間関係、依頼という電話の性質が起因していると解釈できよう。

次に、会話の進行過程における頻度の変化の有無について観察しよう。

冒頭の依頼提出(39秒の会話で、相づちは10回)や、その直後の被験者国籍の限定に関する対話(3.8秒に1回程度)においては、相づちが非常に頻繁である。しかしその次の2.5分間ほどの会話(主にJ3が質問を出して、J1がそれに答える)においては、相づちの頻度がぐっと下がり、7.4秒に1回程度で打たれている。次の会話はその中からの抜粋である。

会話例⑦(45秒、6回)

J1: ええ、あの、そうねんです。今、今、とりあえず取っているのが中国人なんですね。

J3:

ハイ

J1: で、まあ、この間の修論の時に、韓国人たちを取ったので、ちょっと、ええ、あのう、

J3:

エエ

ソウデスネ

J1: そういう人たちの、そのデータとちょっと別に×××つけたいなあと思ってたけど、

J3:

エエ

J1: まあ、あの、被験者さんはあの、他の違う材料をもう次の実験を考えてますんで、

J3:

エエ

J1: その時、別に今度国と国とは関係なくね、あの、またやっていただこうと思っている

J3:

J1: んですけれども、とりあえず、今あの思っているのが、中国の方なんですけれども、

J3:

J1: じゃ、無理でしょうかね、該当者がいらっしやらないかしら。

J3:

ソウデスネ

2.5分ほどの会話の中心になっている内容は、今回の被験者を中国人だけに限定する理由や実験の方法説明である。J1の話はJ3にとって納得の行かない部分があり、頼まれたら困る、実現が困難であるということになる。理由を述べることは意見主張に近いと言えよう。「自分の好みや意見を互いに主張しあう場面では頻度が低くなった」(黒崎1987:116)という報告と一致した点である。

頻度の低い場面は他にも2か所観察された。それはJ3の提案に対する考えをJ1が述べる時(7秒に1回程度)と、二人の知人がJ1の研究を手伝いたいと言っていた時(J3にとっては新情報である。8.8秒に1回程度)である。

しかし、被験者探しを承諾した後、J3の相づちはまた頻度が高くなっ

た。それは、J1が1人の実験者が来ても大歓迎、随時実施という態度を表明している時（4.4秒に1回程度）である。それは、この時になると、会話の雰囲気が先よりリラックスしてきているからであろうと思われる。

<日本語の相づちの形式と頻度の変化についてのまとめ>

以上分析した結果を次のようにまとめたい。日本語の相づち詞は、待遇的な意味を持ち、会話者双方の人間関係によって使い分けがなされている。つまり、会話の双方の親疎関係は、相づちの形式に直接に影響する。親しい間柄だと、改まり度の低いものを使用し、逆に余り親しくない間柄では、相づち詞の改まり度の高いものを使う。

一方、中国語ほどはっきりしてはいないが、話の内容が相づちの頻度に影響を与える点では中国語に近い傾向を示している。好ましくない話や敬遠したい内容の話、自分の意見を述べる時には、相づちの頻度が低くなる。

5. おわりに

中国語と日本語の電話による会話資料4組に現われている、主に聞き手になっている人の相づちを「形式」及び「頻度」の点から分析し、更に、相づちの使用に影響する要因について、会話の内容、会話者双方の人間関係という2点から分析し、考察を行なった。その結果は次のようにまとめられる。

中国語の相づちの形式は人間関係による変化がほとんどないが、相づちの頻度は話の内容による変化が非常に大きい。関心事、気楽な話、共有知識や共感を持つような話の場合には頻度が比較的高いが、非常に重要な話、新情報、相手のほうがより詳しい内容の話の場合には頻度が低くなり、相づちをはさまず、また話者交替を起こさずに聞く傾向がある。

他方、日本語の相づちの形式は会話する双方の人間関係と関連している。この点では中国語と異なる。また、相づちの頻度は話の内容によって変わるが、変化の幅が中国語ほど大きくない。つまり、会話の進行過程における相づちの使用は平均した傾向を示すと言える。頻度に関する今回の調査結果は黒崎（1987）と一致しているが、中国語の相づちの頻度は話の内容によって差が大きく出ているということに比べれば、日本語の会話に現われる相づちの頻度の変化は余りないと思ってもよからう。

その他、中国語に比べて、日本語の相づち詞のほうがバラエティに富んで

おり、またどのパターンの会話においても頻度がより高い。さらに、相づちの使用に影響する要因も多く、複雑な面がある。これらの差異は、両言語の構造上の違いや社会的、文化的背景の違いによるものであろう。

なお、以上の結果は今回の分析資料に限定して得られたものである。一般化を目指して、今後更なる調査の必要があると思われる。今後は更にデータを増やして分析を重ね、より明確な特徴を明らかにしたいと考える。

<注>

小宮(1986)では、「エエ」「エーエー」などの相づち詞を「エ系」と名付けている。また、改まりの度合いについて、「ハイ」「ハー」「ハ、ハ」などの「ハ系」がもっとも高く、「エ系」はその次に位すると言っている。

<参考文献>

- 金秀芝(1994)「日・韓両言語における「あいづち」の対照研究—電話の会話を中心に」『平成6年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150
- 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号大東文化大学語学教育研究所
- 井ノ上 暁(1991)『日本語の談話の構造分析—勧誘の談話のストラテジーの考察』筑波大学博士論文
- 任榮哲・李先敏(1995)「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5 国際交流基金 日本語国際センター
- 堀口純子(1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10—10
- _____ (1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂
- _____ (1988)「あいづち論」『日本語学』7—13
- _____ (1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12—14
- 水野義道(1988)「中国語のあいづち」『日本語学』7—13
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- 劉建華(1987)「電話でのアイツチ頻度の中日比較」『月刊言語』16—11
- 渡辺恵美子(1993)「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において使用された言語的あいづち—」『日本語教育』82

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程比較文化学専攻3年)